

伝わる気持ち



鳥に興味を持ち、カメラや双眼鏡を手に、見つけては名前や生態を林顧問や林支部長に教わり数年が経ちました。その割には成長していませんが(笑)。街の中でも山の中でも目や耳で鳥を追いかけ、写真を撮っては友人に見せたり話していたら、周りから

「今まで何も気にしてなかったけど、鳥の声がよく聴こえるようになった」

「気が付かなかったけど家の周りにも色んな鳥がいるんやわ」

「あれ何の鳥？」

と聞かれるようになってきました。そんな感じでいつの間にか自然にコウノトリや環境の話にもなり、地球温暖化や里山保全などの問題にも興味や関心を持ってくれるようになりました。

『今、自分にできる事』を考え、取り組んでいる知り合いも少しずつ増えてきました。

一人じゃできない事でも、仲間が増えれば何かが変わるかも。気持ちが周囲に伝わると自然に向こうから話しかけてきたり、興味を持ってくれるんだと学んだ私は、今日も元気に動いてお喋りするぞ。
(エコビレッジ交流センター指導員 田川由美)



編集後記

1年が過ぎる速さは、年齢なんだそうです。2歳の子は時速2キロで歩み、65歳は時速65キロで歩んでいるそうです。いえいえ、歩んでいるなんてものではありません。車で突っ走っているようなものです。年をとればとるほど、1年が早く感じられるのは、時速が早くなっているから…(笑)

速度違反にならないように、今年をあえてゆっくり進みませんか？

時々、休憩や談笑する余裕も必要ですね。そうして元気に過ごしましょう。

本年も何卒よろしくお祈りします

(野村)

越前市エコビレッジ交流センター【住所】福井県越前市湯谷町25-25-2

Tel/fax 0778-28-1123 E-mail info@ecovilg.jp

URL <http://www.ecovilg.jp/>



～風だより～

こうのとりの

第12号
2025.1.1

越前市エコビレッジ交流センター
(公財)日本鳥類保護連盟福井県支部

環境大臣賞受賞

「第58回 全国野生生物保護活動発表大会」
(主催/環境省・公益財団法人 日本鳥類保護連盟
後援/文部科学省・林野庁)において、越前市坂口
小学校が「環境大臣賞」を頂きました。

地区の組織「坂口地区うらの町づくり振興会
環境部会」と学校、エコビレの三つの連携と継続が
認められました。

長年関わってきた者にとって、本当にありがたい
ことです。あんなことしたい、こんなことしたい
と思っても一人では何にもできません。上手くい
かなかったことも思い出しながら、この賞を今後の
励みに、地域活性化につなげていきたいです。(野村)



新年に思う

日本鳥類保護連盟 福井県支部長 林 昌尚

ここ10年ほど、池田町の最高峰「部子山」に通い続けていますが、2024年は今までにない変化を感じました。

ニホンジカによる食害により、道端など特に開けた場所の植物がほとんど食べられてしまい、残っているのは猛毒のヤマトリカブトばかり…。7月頃から沢山飛来していたアサギマダラの蜜源であるヨツバヒヨドリも、ほとんど姿を消してしまったため、アサギマダラの数も極端に少なくなっていました。

また、本年度は鳥の種類や数もかなり少なかったように感じました。聞こえてくるのは外来種ソウシチョウの声ばかり。これらは地球温暖化による気候の変化が影響しているのかもしれない。これからも継続して観察・調査して行きたいと思えます。皆さん是非身近な自然の中で見たり聴いたり、感覚を研ぎ澄ませて感じてみてください。何か少しでも感じる事があったなら、それは重大な環境の変化なのかもしれません。

新年度もよろしくお祈りします。

県内・市内のコウノトリ情報



「このとり」10号(令和6年7月1日発行)でご報告した通り、令和6年、県内では15羽巣立ちました。これは兵庫県に次ぐ、国内2位の繁殖数なのだそうです。

2位という数字をかみしめながら、巣立たせるだけではない、もっと生きものがいっぱいいる環境を取り戻さなくてはならない、と焦りに似た感情が沸き上がります。

坂口地区においても、子どもたちと「生きもの観察会」は続けているものの、コウノトリが喜びそうな大きな生きものはなかなか見つかりません。子どもたちに、「大きなカエルがいいと思ってウシガエルは持ってこないでね」と念を押しています。ウシガエルは「特定外来生物」です。いろいろなイベントに出展し、支部の活動のPRもしますが、ウシガエルは外来種であることを伝えていきます。驚くことにほとんどの方がご存じないです。コウノトリの広報も必要だけど、外来種についてももっと広報していかないとダメだろうなと思います。

県内でも、越前市は3か所で計7羽巣立っています。たくさんの生きものと共生する越前市、北陸新幹線の「越前たけふ駅」は、コウノトリが餌をついばむ姿がモデルです。

ただ、自然豊かな環境だけでは活性化につながっていかないのが現状。兵庫県豊岡市のように、観光ビジネスにおいても進んでいくといいのですが…。(野村)



飛鳥建設ホームページより

支部会議

11月29日(金)、連盟本部事務所において、支部会議が開催されました。福井県支部からは事務局が出席しました。もともと、リモート会議が苦手な事

もあって、席上で顔を合わせながら話し合うことは、会場が東京であれ京都であれ、いとわずに参加させていただきます。

どの支部からも出てきた課題・問題点は、会員が増えないということ。福井県支部の総会にも、毎回話っている課題です。結論を出すのは難しいかもしれませんが、みんなで話し合うことで、いいアイデアや情報がはいるのではないかと思います。焦らずコツコツ前に進んでいきましょう。

福井に暮らすツバメたち

日本鳥類保護連盟 福井県支部 大坂 英樹

福井には、3種類のツバメが繁殖していることをご存じですか？ それらは、ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメです。姿もよく似ていますが、それぞれの腰の色に違いがあります。ツバメは黒、イワツバメは白、コシアカツバメは赤の腰を持ち、どの種も非常に俊敏に飛び回るのが特徴です(図1)。

これらのツバメが福井でどのように暮らしているのかを知るため、3年間にわたり市民調査を行いました。市民の皆さんに巣を見つけたらスマホで写真とともに種名や場所を送ってもらうよう呼びかけたところ、合計で830件もの情報が集まりました。

福井のツバメたちの分布

集まった情報を地図に落としてみると、3種類のツバメたちは海岸、平野、山間部と、県内の幅広い地域に生息していることがわかりました。特にコシアカツバメは、他県では沿岸部に多いとされていますが、福井では内陸部にも多く見られるという興味深い傾向があり、その理由はまだ解明されていません。

巣の特徴と営巣の違い

調査では、一つの建物にいくつ巣があるかも記録しました。その結果、ツバメは単独営巣が多く、イワツバメは集団営巣をする傾向が見られました。コシアカツバメはその中間で、単独・集団の両方の形態が見られました。これらの違いは、種ごとの餌の量や天敵からの攻撃を避けるための戦略が関係しているはずですが詳しいことは今後の課題です。送られてきた写真を見ると、ツバメたちが人間の建物を上手に利用して巣を作っていることがわかります。人工物を利用しながら子育てし、それを人がサポートする写真を見ているだけで、自然と温かい気持ちになります。

ツバメたちの魅力と観察の楽しみ

ツバメたちは普段の観察でも、それぞれに魅力的な姿を見せてくれます。ツバメは、夏の終わりになると数万羽を超える集団で葦原に飛び込む姿が見られ、その光景はまさに圧巻です。県内では、九頭竜川の下流で毎年探鳥会が開かれているので、ぜひご覧ください。一方、イワツバメは繁殖後に群れを作りますが、そのねぐらはいまだ見つかっていません。状況証拠から一晩中飛び続けているのではないかと考えられていますが、県内のダムで夕暮れ時に数千羽が休息している様子が目撃されており、もしかするとまだ知られていないねぐらが存在するのかもしれない。また、渡りの時期にはアマツバメの仲間も飛んでいます。中でもハリオアマツバメは、高速でビューッと音を立てながら飛び姿が非常に魅力的です。ツバメとアマツバメは姿がよく似ていますが、先祖は異なる鳥です。それぞれが空に適應していく進化の過程で似た形になったのです。そんなことを考えながら眺めていると、まるで進化の壮大な実験を目の当たりにしているような気持ちになります。

福井に暮らすツバメたちは、知れば知るほど興味深い存在です。ぜひ皆さんも身近なツバメに目を向けて、その魅力を感じてみてください。



図1 3種のツバメの飛翔